

一心寺かわら版

第三十一号 平成二十六年三月発行
ホームページ (<http://www.jimyuzan-isshinji.com>)



いじめを考える〜子供に伝えたいこと〜

春は別れと出会いの季節、これまでの仲間との別れを悲しみつつ、入学・就職など新しい出会いに心を躍らせている人もいらっしゃるでしょう。この春より観音寺では、南小学校と東小学校との統合により新観音寺小学校が開校します。人口減少に伴い、これから各地で次々に学校が統合されてゆくことでしょう。生徒が多くなれば、友達がたくさんできるという良い面があります。その反面、広い地域から互いを知らない子供たちが集まるので、今まで以上にいじめ等に注意しなければならぬのではないかと心配する声もあります。

いじめは度々大きな事件となり報道されますが、多くは表には出ないため実数の把握は難しいようです。特に小学校高学年から中学二年生が多いそうで、近年では平成二十三年に大津市の中学二年生が亡くなるという痛ましい事件がありました。複数の同級生から暴行などを受けていた男子生徒が、自宅マンションから飛び降りて自殺。学校と教育委員会の隠蔽体質に批判が集まり、第三者委員会が設けられました。その報告書では、自殺の原因となつたいじめを「暗いトンネル」に例えました。重篤ないじめが少年に屈辱感、絶望感をもたらし「いじめの世界から抜け出せないことを悟り、生への思いを断念せざるを得なかった」と指摘しています。現代のいじめはなぜこれほどまで深刻化したのでしょうか。

友久久雄龍谷大学教授は、「昔もいじめはあったと思うが、いじめる側も常に相手のことを考えていた。人間は孤立することが最もつらい。いじめられている子が孤立して悩んでいることに気付けば、「もうこれ以上は」とブレイキが自然にかかった。相手の気持ちに分かる人間になるには、子どもの頃に親や周囲の人間たちに愛される、受け入れられる経験が大切。愛され、受け入れられた子は相手の気持ち分かるようになる。そうした経験が無い子どもたちのいじめは相手の気持ちからず、ブレイキが利かずにエスカレートしていく」と述べています。

カウンセリングが専門の井上敏明氏は、「いじめの発生のルーツとして①強い個性の人間がストレスを発散するのに弱いものを対象にする②衝動的エネルギーにあおられて欲求を成就するための暴力行為③嫉妬心の発露として優位に見える相手をおとしめようとする欲求④不器用で空気の読めない者が不具合感や嫌悪感を抱かせることに腹を立て、無き者にしようといったふる、などが考えら

れる。これらは他者との関係を介して自分の存在を確かめ自己を防御しようとする誰もが抱く心のやりくり、心の力動性に起因している。人間は人をいじめることを良しとしており、いじめが好きともいえる。これは事実だ。なぜなら人間は動物だから。そのことを忘れてはいけない」と述べています。



『歎異抄』に親鸞聖人と唯円の間答として、

「またあるとき聖人が、「唯円房はわたしのいうことを信じるか」と仰せになりました。そこで、「はい、信じます」と申し上げると、「それでは、わたしがいうことに背かないか」と、重ねて仰せになったので、つつしんでお受けすることを申し上げました。すると聖人は、「まず、人を千人殺してくれないか。そうすれば往生は確かなものになるだろう」と仰せになったのです。そのとき、「聖人の仰せではありませんが、わたしのようなものには一人として殺すことなどできるとは思えません」と申し上げたところ、「それでは、どうしてこの親鸞のいうことに背かないなどといったのか」と仰せになりました。続けて、「これでわかるであろう。どんなことでも自分の思い通りになるのなら、浄土に往生するために千人の人を殺せとわたしがいったときには、すぐに殺すことができるはずだ。けれども、思い通りに殺すことのできる縁がないから、一人も殺さないだけなのである。自分の心が善いから殺さないわけではない。また、殺すつもりがなくても、百人あるいは千人の人を殺すこともあるだろう」と仰せになったのです。…(中略)…「人はだれでも、しかるべき縁がはたらけば、どのような行いもするものがある」と仰せになったのです」

とあります。どんなことでも自分の思いだけでは起こせない、善い心があるから殺人を起こさないのではない、そうなる縁がはたらけば誰でもどのようなことでもしてしまふのである、と。怖いことです。私もいつ加害者になるかもしれないのです。

いじめは、子どもの世界に限ったことではありません。人間は、二人以上いれば当然「嫌な思い」が生まれます。嫌なことをさせられる苦しみは、したいことができない苦しみよりはるかに大きいと感じます。また、人に嫌な思いをさせてしまふ人も、違う場面では嫌な思いをしているのかもかもしれません。それを伝え合い、分かり合おうとすることが大切で、相手に嫌な思いをさせないように心掛けることから良好な人間関係が始まるのでしよう。

お釈迦さまは、「どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように、他人にとってもそれぞれ自己がいとしいのである。それ故に、自分のために他人を害してはならない」、「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」とおっしゃいます。ここに、「自分のために」、「己が身にひきくらべて」とあります。すべてのいのちは自分が愛しい。自らのために自らと同じように他を大切にしなければならぬ。他を害するならば私も害されてしかるべきと教えます。



先の『歎異抄』には、「このようなつまらないものであっても、阿弥陀仏の本願に出会わせていただいてこそ、本当にその本願をほこり甘えることができるのです」とあります。

阿弥陀仏は私がどのようなものであっても、どのようなことをしても見捨てることなく願い続けておられます。そういう存在があればこそ、何をしでかすか分からない自身に正面から向き合うことができるのでしよう。

いじめに悩む子には「君は一人じゃない、君を守る人がたくさんいるんだよ」、いじめている子には「やったことは反省し、一緒に克服して新たな道を歩もう」と寄り添うことが周囲の人々には求められます。

「いじめはだめ」、「いのちは大切」ということは誰もが知っていることです。しかし、それを実践するのは難しいことです。

それぞれが違う心を持っており、その違いがある生きとし生けるものが集まって世の中ができています。誰もが自分が愛しく、大切なのです。人に嫌な思いをさせないように努めるべきであり、相手を尊重することが、私が尊重されることとなるということをお伝えしていきたいものです。



仏教が生んだ日本語⑤ 「出世」

相撲の力士が幕内に入って大関、横綱になったり、サラリーマンが平社員から部長、専務を経て社長になったり、一般には、成功して社会的な地位が上がることを出世と言います。また、成長するにつれて名前が変わる魚がいます。すずきは、せいご↓ふっこ↓すずき、ぶりは、つばす↓めじろ↓はまち↓ぶりと呼び方が変わる、いわゆる出世魚です。勉強も仕事も万事出世のために多くの人は頑張っているようです。



ところが、この言葉は、出家して仏道修行することを意味するとともに、もともとは、ブツダが世の中に現れることを示す仏教用語でした。経典は、次のように説いています。

「世に興し給う所以は、道教を光闡し群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲してなり」(『無量寿経』)

これは、如来は何のためにこの世に出られたのかという出世の根本目的を、お釈迦さまが自ら示された言葉です。如来がこの世に出られたわけは、教えを明らかにひらいて、すべての生きとし生けるものを救い、真実の利を与えるためである、と。

真実の利とは、この世のほしいままなる欲望が思い通りになうことではありません。いかなる環境にあっても、自分自身の存在の尊さ、厳かさに気づいて、よろこびをもって今をたくましく生きるという利益です。

お釈迦さまは、インドの釈迦族の皇太子として生まれ、この世の

権力と栄華を約束されていましたが、老いと病と死によって常にこの人生が脅かされていることに気付きます。そして、若さや健康や地位や財産の中には真のしあわせはないということを知って、本当のしあわせを求めて城を出て修行されました。

お釈迦さまが目覚められた真理を説くのが仏教です。また、お釈迦さまはその真理を説くためにまことの世界(如)からこの世に出現された(来)のであると経典に示されてきました。それは、今日用いられている「出世」とはまったく反対の意味です。この言葉から、自分がこの世に生まれ出たのは本当に何のためだったのかを静かに考えてみたいものです。(参考『仏教が生んだ日本語』大谷大学編)

報恩講報告

本年も報恩講が勤まりました。定例の法要の中でも報恩講だけは登礼盤といって導師がご本尊正面の礼盤に上がり、伽陀、礼、勧請、下高座文など最も丁寧な形で勤めています。もちろん正信偈はみなさんで唱和。法話は川田信五師(東かがわ市・大信寺)。私たちはほっておいたら邪見・驕慢という自分勝手な心で生きて苦しんでしまう。仏教はそれに気付かせて正見、正しいものの見方を与えてくれる。真宗は信心として仏の智慧をたまわる教え。昔から真宗門徒は自分の願いを叶えてもらうためではなく、

朝夕にお礼を申すといって阿弥陀仏を礼拝してきた。それによってお互いにお礼を申して念じ合う、笑顔の生活が恵まれ、空しくない人生を歩むことができるのです、と聞かせていただきました。



(二月八日、雪景色の境内)



初参式報告

報恩講に合わせて初参式を行いました。初参式とは、生まれていのち、幼いいのちがほけの子として慈悲に包まれやすく育つことを願って勤めるものです。当山では初めての開催。九名のお子さんが記念品の念珠を手に焼香、お勤めに参列しました。最後に親御さんと共に記念写真を撮りましたが、参拝者からも「子供さんの顔を見たら元気が出る」との声、笑顔に包まれた初参式となりました。